

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 濱田華練

本論文「一なるキリスト・一なる教会：12世紀ビザンツ＝アルメニア教会合同交渉とネルセス・シュノルハリのキリスト論」は、1165年から1173年までビザンツ皇帝マヌエル一世との間で行われたビザンツ＝アルメニア間の教会合同をめぐる交渉・議論に、アルメニア側の代表として参加した当時のアルメニア教会カトリコス（総主教）ネルセス・シュノルハリの生涯と思想、とりわけキリスト論に着目し、その特性を明らかにしたものである。アルメニア教会は、6世紀にカルケドン公会議の否認を宣言し、カルケドン信条の「一なるヒュポスタシスにおける二つの本性」を受け入れず、「受肉したロゴスの一なる本性」というキリスト論を主張してきた。

ネルセス・シュノルハリは、アルメニアの「黄金時代」4世紀の主教グリゴル・ルサウォリチの末裔にして、11世紀から13世紀まで7人ものカトリコスを輩出した名家パフラヴニ家の出身であり、カトリコスとして活躍しただけでなく、優れた神学者であり、また格調の高い多くの韻文作品を残している。本論文は、ネルセスのキリスト論について、教会合同に携わる前と後でいかなる思想的变化があったか、教会合同議論においてネルセスが置かれた政治的・歴史的立場が彼のキリスト論にいかなる影響を与え、最終的に彼の世界観、自然観、人間観がいかにしてキリスト論に結実したかを明らかにした極めて質の高い力作である。

本論文は、序論、第一部の三章、第二部の三章と結論から構成されている。以下、その内容を要約する。

序論では、ネルセス・シュノルハリに関する研究史が批判的に検討されている。従来、ネルセスの思想は、12世紀のネルセス自身ではなく、研究者の側の「正統」概念に基づいて評価されてきた。先行研究の立場は三つある。①ネルセスはビザンツとの交渉でカルケドン派に転向した。②ネルセスはあくまでもアルメニア教会伝統のキリスト論を堅持した。③ネルセスの取った態度は「エキュメニズム」の先駆けであった。しかし、濱田氏はそのいずれにも反対の立場で、ネルセスがカルケドン、反カルケドンの主張のどちらかを二者択一的に選ぶことなく、両者は「ロゴスが受肉した」という人智を超えた事態を何とか説明するための相補的なものであったという推論をし、その立証のために、ネルセスの初期から晩年に至る韻文、公式書簡、信徒への回勅など、あらゆるジャンルの史料を年代順に丹念に分析する方針を提示している。

大きく分けて第一部では、ビザンツとの教会合同をめぐる交渉に至るまでのネルセス・シュノルハリの思想的発展を、当時アルメニア社会が置かれていた「分裂」状態とその克服という観点から論じ、第二部では教会合同をめぐる議論の進展とその中で展開されたネルセスのキリスト論について論じている。

第一部第一章では、ネルセスの出自と歴史意識について、『叙事詩』に基づいて分析している。ネルセスは、アルメニア教会史を自身の名門の出自と合せて記述し、地理的・政治的に分断された12世紀当時のアルメニア人社会を一つにまとめ上げるという再建者としての自覚を描いた。第二章では、アルメニア教会を含む全世界の教会が分裂状態にあるという現実とネルセスがどう向き合ったかを彼の代表作『エデッサの哀歌』を中心に明らかにしている。当時アルメニア教会は第一回十字軍によってにわかに新勢力として彼らの前に現れたラテン・カトリック教会との協力の可能性を模索していたが、イスラムのザンギーによるエデッサ陥落を描いた『エデッサの哀歌』でネルセスは、ラテン・カトリックがエデッサを奪回すること、またかつての「全地教会」の記憶を呼び覚ますことで「一致」のヴィジョンを示そうとした。しかし、現実の歴史は、第二回十字軍の敗退とともにそうした救済を期待できる展開ではなくなった。第三章では、ネルセスの関心は、人類あるいは教会・民族の歩みとしての「歴史」から、個人の「信仰」へと移ったことが韻文作品や書簡の分析によって明らかにされている。この段階でネルセスは、「正統な信仰」とは、各人が「神が常に近くに在る」ことを信じ、一人一人が神の前で主体的に善をなすことであるという境地に至った。

第二部第一章では、教会合同交渉時にネルセスが最も重視したのは、ビザンツによる武力の行使を避けることであつた点が明らかにされた上で、「外交的配慮」が彼のキリスト論に影響したか、という問題提起が行われる。第二章ではカルケドンのキリスト論と非カルケドン派のキリスト論の相違についてその教義の差が詳しく検討された上で、ネルセスの1165年以前と以後のキリスト論が比較され、「外交的配慮」が彼のキリスト論を変質させたわけではなく、むしろ彼はアルメニア教会の伝統的キリスト論に立脚していたことが立証されている。第三章では、ネルセスのキリスト論について、彼の人間論、宇宙論、そして教会論との関わりにおいて論じている。「ロゴスが受肉したキリスト」を論じることは、当然、人間について、また被造物について、「キリストのからだ」たる教会についても論じることになるからである。たとえば人間が魂と肉体という二が一に結合したものであることも、万物における二（あるいは多）が一に合体しているさまざまな現象も、神性と人性が結合した究極の「二からなる一」であるキリストの存在に包摂されていることがネルセスの著作から読み取られている。そして分かれた教会が一となることもまた、キリストが「相反する二を一とした」という真実によって証されており、神が人間への無限の愛によって受肉したよ

うに、教会が一となるには各教会の互いの愛が不可欠であることをネルセスは示したと結論づけている。

結論は、第一に、ネルセス・シュノルハリのキリスト論は、彼の「分かれたものを一つにする」という問題意識に裏打ちされていることを明らかにしている。初期作品ではネルセスはその「一」が歴史の必然として実現されることを望んでいたが、過酷な現実展開の中で、一人一人の神に対する信仰と善き行いこそが一致を成し遂げる道であるという主張に変わっていった。ネルセスの信仰告白に見られるキリスト論は、厳密な用語の定義に基づいて「一」の中に「二」が存在することを宣言するカルケドンの体系よりも、「二」の「一」への志向性を強調するアルメニア教会の伝統的なキリスト論に近いことが明らかにされた。もう一つの結論は、ネルセス・シュノルハリのキリスト論の独自性は、その用語法ではなく、教会が一となりうる確固たる根拠を他ならぬ「キリスト」そのものに置いたことを明らかにしている。そして、「キリストを目指して、キリストによって示された愛」を各教会が互いに発揮することが、一見、単純すぎるように見えるが、各種の「分裂」を目の当たりにしたネルセス・シュノルハリが到達した究極の結論であったことが論じられている。

審査委員会では、本論文の着眼点の独創性、論証の説得性に高い評価が与えられた。12世紀の東地中海地域は、ビザンツ教会とアルメニア教会の対立の他、ラテン・カトリックの十字軍派遣、イスラム勢力の台頭など、歴史的にも極めて複雑な事象が絡み合い、その史実を明らかにするだけでも、当時のアルメニア語、ギリシャ語、ラテン語などの史料を読み込み解析していくのは並々ならぬ学術的・語学的力量を要する作業であった。それを踏まえた上で、ネルセス・シュノルハリの極めて文学性の高い韻文を含む全ての著作を時代順に読み込み、彼独自のキリスト論を提示した本論文が、歴史学、神学、教会史などに為した貢献は極めて大きいものである。

審査委員の中では、アルメニアおよび東地中海地域の歴史を緻密に記述分析し、従来「敗北の歴史」としか受け取られていなかったアルメニア教会史に新たな光を当てた第一部を高く評価する者と、「ロゴスの受肉」をめぐるビザンツの正教会とアルメニア教会の神学論争の中で示された、ネルセス・シュノルハリの「神性と人性の合一は被造世界の合一についても語っている」とするキリスト論を高く評価する者に分かれた。これは、本論文が歴史学、教会史から神学に至る広範な幅をもつスケールの大きい論文であることを物語っている。

しかし他方、第一部と第二部のつながり、バランスにやや難があるという意見も出た。例えば、ネルセス・シュノルハリを輩出した名門パフラヴニ家が、第二部の教会合同論争ではいかなる役割を果たしたか、という点にも言及してもらいたかった。また第二部のネルセス・シュノルハリのキリスト論には、ビザンツ

のみならずラテン・カトリック、ギリシャ哲学などの影響も必ずやあったはずであり、残された文献からそれを辿ることは難しいにしても、そうした背景を明らかにすることで、論文に一層の深みが加わっただろう。また扱った年代の歴史の複雑さがあっても、誤植、地名表記の不統一、また12世紀の韻文アルメニア語の難解さを差し引いても参照引用されたネルセス・シュノルハリのアルメニア語の翻訳に誤訳が散見されたなどの指摘があった。

しかし、これらの指摘は、従来、世界的に見ても明らかにされていなかった12世紀アルメニア教会とビザンツによる教会合同交渉の歴史的、政治的背景を明らかにしただけでなく、最も神秘的な「ロゴスの受肉」というキリスト論について深い考察を行った本論文の価値を損なうものではない。以上から審査委員会は、全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定した。